

# 大阪大学超域イノベーション博士課程プログラム

## 第1回 外部評価委員会の概要

大阪大学超域イノベーション博士課程プログラムでは、第三者の視点からプログラムの運営についての評価を行い、その意見をプログラムの改善に反映させることを目的として、外部評価委員会を設置いたしました。ここに掲載するのは、平成24年12月14日開催の第1回外部評価委員会における評価・意見の概要です。

外部評価委員会の中で得られた評価・意見を、グローバルに活躍できる人材育成を目指す本プログラムの発展と進化に役立てていきたいと思っております。

なお、外部評価委員は以下の通りです。

(文責：超域プログラム自己点検・外部連携ワーキング)

### 外部評価委員 [役職名は、委員会開催当時のもの]

岸本 喜久雄	東京工業大学 大学院理工学研究科工学系長 教授
齊藤 紀彦	株式会社きんでん 代表取締役会長
大坊 郁夫	東京未来大学 学長
中野 健二郎	京阪神ビルディング株式会社 代表取締役社長
原山 優子	東北大学 教授
広渡 清吾	専修大学 教授
宮部 義幸	パナソニック株式会社 常務取締役

### 講評の概要

項目	内容
プログラムの趣旨	<b>【評価できる点】</b> <ul style="list-style-type: none"><li>専門、国境を超えて社会システムの変革を導くようなグローバルリーダーを養成するという、現代社会が求める博士人材育成の先進的かつ挑戦的な取り組みと評価できる。高い教育目標を掲げ、優秀な学生を選考するとともに、プログラムの担当者たちも専門の垣根を越えて、学生と一体となって新しい教育の試みに取り組んでおり、順調なスタートを切っている。</li></ul>

	<p><b>【留意すべき点】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>リーディング大学院構想は、日本の大学院制度の全体的な再編とバージョンアップを目的とするものと捉えられる。その点で、本プログラムには開拓者的な役割が与えられている。その成否は、期間限定のプロジェクトではなく、定常的制度として日本の大学院制度のなかにビルドインされることをもって測られる。それゆえ、文科省の支援を本体としつつも、大阪大学としての大学院制度改革に対する腰の据わった取組みが必須である。</li> </ul>
<p>育成されるべき人材像</p>	<p><b>【留意すべき点】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>20歳代の10年間は、そこでの経験が行動パターンとして生き続けるという意味で大切な時代なので、責任感を持って取り組んでもらいたい。</li> <li>論理・技術を無視した感情的言説が跋扈する現状を見るにつけ、「自らの専門を専門外の人に分かりやすく説明でき、また他の専門の基本を把握できる」人材の育成に特に力を入れてほしい。</li> <li>単なる「評論家」の育成とならないよう、芯をしっかり持った実行力のある人材の育成を期待する。</li> <li>強い意志のもとで着実な行動を取れる人材、周りを驚かせるような人材の輩出を期待する。</li> <li>プログラム履修生に、国や大学、そして社会も支援していることを自覚させ、社会に恩返しをするという意識を育んでもらいたい。</li> </ul>
<p>カリキュラム全体</p>	<p><b>【評価できる点】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>個別専門性と超域性との相互関係をどのようにつくり上げるかということが最大のポイントであり、それゆえ、本プログラムによるポテンシャルの開発が専門性開発＝深化と循環関係を成すことが期待される。</li> <li>超域ラーニングなどの各種教育プログラムは、専門の境界を超えた問題解決を可能とする能力の涵養のための意欲的な内容で構成されており、専門を異にする学生たちが互いに切磋琢磨する場として、高い教育効果が期待できる。</li> <li>本プログラムが目指すコンピテンスは、基本的には全ての博士学生に身につけてほしい力であり、この課題に正面から取り組むこと自体、評価に値する。この布石が大阪大学の他の研究科、また他大学に波及効果を生み出すことに期待する。</li> </ul> <hr/> <p><b>【留意すべき点】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>超域性が専門性と循環関係にあるとすれば、グローバル性に対応するローカル性やナショナル性についても考える必要がある。科学に取り組む者としての自己の立ち位置を想定しつつ、そしてそれを絶えず相対化し、全体を関係性のなかで把握する — この観点から、超域モジュール・ラーニングで提供される科目の配置にさらなる工夫が求められる。</li> <li>履修生の能力を十全に引き出すために、手厚いメンタリングのシステムを確立することも重要である。</li> </ul>

履修生の 選考	<p><b>【評価できる点】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>重層的な履修生選抜方法が的確であったことを受けて、履修生の経歴、性別、専攻、目的・問題意識などが多様であり、相互の刺激となる良いメンバー構成となっている。</li> </ul> <hr/> <p><b>【留意すべき点】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>多様な能力を持つ学生の受け入れが求められるが、そのためには、文系と理系の学生に対し、異なる視点から評価を行うことも考えられる。</li> <li>初年度は短い準備期間でのリクルートを余儀なくされたにせよ、今後は、異なる環境に対する拒絶反応を和らげるためのオープンハウスなど、学部学生にも模擬体験の場を作ることも重要である。</li> </ul>
担当教員	<p><b>【評価できる点】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>学内外を問わず幅広く構成されており、博士課程教育リーディングプログラム・オールラウンド型の目的に沿うものと評価できる。</li> <li>既存のプログラムとは異なる教育内容、教育手法、プログラムマネジメントが必要であり、本プログラムは教員やスタッフに対しても、旧来の大学教育では重視されなかったコンピテンスの発揮ないしは習得の機会となっている。担当者は試行錯誤ながらも社会実験を行い、学習しつつ一步一步前進しており、この機会を多分に活用している。</li> </ul> <hr/> <p><b>【留意すべき点】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>本プログラムが長続きするためには、参画する教員にも相応の喜びがなければならない。15回の授業内容を5回で実施すること自体大変な工夫を要することであり、教員にとっても何らかの面白み、楽しさを実感できなければならない。</li> </ul>
取り組み の全学的 な展開	<p><b>【留意すべき点】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>プログラムが定着していくためには、担当者以外の教員の協力が不可欠である。各研究科の指導教員をはじめ、様々な教員の理解や協力を得るために、超域ラーニングに係わってもらおう等の工夫も求められる。</li> <li>プログラムが掲げる目標を学内での共有することが重要である。研究領域を超えた教育を全学的に実現するためには領域間の厚い壁を乗り越えなければならず、例えば、超域プログラム履修生とそれ以外の大学院生とのジョイント・セッションを学内各所で開催し、プログラムの思想を共有する機会を増やすなど、そのための仕掛けが必要である。多様なネットワークの創出を通じ、大学全体での共有理解が段階的に拡大し、幅広い教員をプログラムに巻き込んでいく必要がある。</li> <li>本プログラムの教育対象は履修生に留まるものでなく、教員をも巻き込むものである。教員に対しては、本プログラムにおいて構築されつつあるフィロソフィーの共有を図るべく、機会あるごとに地道な説明を行う努力が必要となる。直近では、プログラム履修生の指導教員に当事者意識を抱かせることが肝心である。</li> </ul>

<p>将来におけるプログラムの継続</p>	<p><b>【留意すべき点】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>社会的成果が得られるには、履修生たちが社会で活躍する時期を勘案し、5年から10年ほどの経過が必要である。それも含め、本プログラムの今後の継続を、大学としてどう保障するかが重要である。</li> <li>「決めたら、継続してやる」。これは企業においても重要である。7年という予算上の制限を超えて、最低10年以上はこのカリキュラムを継続するため、今からその仕組み作りに取りかかる必要がある。国立大学法人大阪大学が決意を持って、この試みを完遂することが求められる。</li> </ul>
<p>社会への発信・社会との連携</p>	<p><b>【留意すべき点】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>履修生の将来とも関連するが、このプログラムの存在を経済界にもさらに広く知ってもらい、その内容に理解を深めてもらうための活動をさらに強化すべきである。</li> <li>本プログラムの取り組みが社会に広く受け入れられていくために、類似のリーディング大学院プログラムに取り組む他大学との連携を深めるべきである。また、そのようなプログラムに所属する履修生同士の交流も有益である。</li> <li>プログラム終了後の採用問題も含め、産業界とも連携して上手く「出口」をつくり、5年後に履修生たちが素晴らしい次のステップを踏み出せるよう、協力していきたい。</li> </ul>
<p>評価・検証</p>	<p><b>【留意すべき点】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>今後の本プログラムの改善に資するためにも、これまでの大阪大学における教育改革の各種プログラムについての個別的＝総括的評価が必要である。</li> <li>プログラム推進にあたり、既存の教育プログラムに対し何を試み、その結果、どこが変わり、履修生には従来とは異なる体験をどのように経験させることができたか、等々、そのプロセスを重視してもらいたい。日々の試みそのものに価値があり、その点もアピールすべきである。</li> </ul>